

この建物は、爆心地から約3.2^{キロ}の距離に位置していたため倒壊せず、中にいた生徒も無事でした。しかし、強い爆風によって窓ガラスは割れ、北側の屋根の鉄骨はすべて下向きに折れ曲がりました。8月6日から7日にかけては、病院などに入りきらない負傷者が次々と運び込まれたようですが、手当もできないまま亡くなる人が多かったといわれています。

戦後は、食品会社がこの建物を借りて工場にしましたが、昭和50年代の初めには使われなくなり、しだいに荒れていきました。



荒れた建物（昭和58年）

現在は、建物南側の一部が郷土資料館として、また、37.5mもの高さがあった煙突は、倒壊の恐れがあった上部を取り除いてレンガ造りの下部が、それぞれ保存されています。

郷土資料館開館



広島市郷土資料館

旧糧秣支廠の建物は、昭和50年代の後半になって、明治時代以降の歴史の証人として、その一部分が修復・保存されることになりました。

原爆の爆風の傷あとを保存し、できるかぎりの復元がおこなわれた建物は、昭和60年（1985）4月に広島市の重要有形文化財に指定され、5月には、広島市で初めての人文系博物館として生まれかわりました。

明治、大正、昭和と長い月日を生き抜いたこの建物は、今日もおとず訪れる人々に、広島^{あゆ}の歩んだ歴史を語りかけています。

学習の手引

第17号

きょうどしりょうかん

郷土資料館の建物

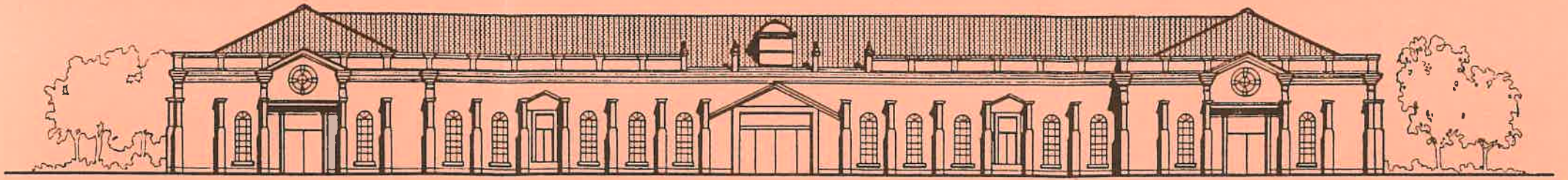


完成した時の糧秣支廠（明治44年） 大林組資料室蔵

広島市郷土資料館

〒734 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号

☎ (082) 253-6771



建物の歴史

広島市郷土資料館は、洋風の赤レンガ造りの美しい建物です。このようなレンガ造りの建物が日本に建ち始めたのは、明治時代のことです。当時の日本は、^{おうべい}欧米の文明を取り入れ、近代的な産業をおこして、工業力を強める政策をすすめていました。こうしたなかで、建物にも変化がみられ、レンガ造りの建物がたくさん生まれました。



缶詰工場で働く人々（昭和の初め頃）

岡村幹雄氏蔵

明治27年（1894）に始まった日清戦争で、兵隊を送りだすのに宇品港が使われてからは、広島に陸軍の施設がたくさん造られました。現在の郷土資料館の建物もそのひとつで、もともとは、^{りょうまつしやう}陸軍の糧秣支廠（陸軍用の食糧を集めたり、作ったりする施設）の^{かんづめ}缶詰工場として明治44年（1911）に建設されたものです。

建設以来、大正、昭和と^{そうぎやう}操業しつづけた缶詰工場ですが、昭和20年（1945）になって、缶詰の生産は中止されます。これは、昭和16年（1941）に始まった太平洋戦争が激しくなり、工場の機械を^{そかい}疎開させたためでした。かわって敷地内で畑作りなどが行われるようになり、その作業を行うために集められた^{せいと ひかえしつ}生徒の控室として、この赤レンガの建物が使われました。そして、昭和20年8月6日——^{げんしばくだんとうか}広島への原子爆弾投下の日をむかえたのです。

昭和20年8月6日

～^{どういん}糧秣支廠に動員されていた

15才の女生徒の^{きらく}記録～

『雲一つない青空、何時ものようにまた暑い一日が始ろうとしていた。其の日も畑仕事の予定だったように思う。何時もより始業が少し遅れていたのだろうか、出席をとり終えたちょうどその時、八時十五分、右斜め上方（西北の方向）で^{きやうれつ}強烈なオレンジ色の^{せんこう}閃光、とっさに「^{しょうめいだん}照明弾」。と小野さんが叫んだ。工場の方からゴーという^{ものすご}物凄い響きと一緒に一丸となつて襲ってきた^{おそ}ガラスの破片、鋭い牙を瞬間にみる。』

花田美枝子、吉田久子 記

「広島陸軍糧秣支廠（宇品）」より抜すい
（『おもかげ —炎と瓦礫の中に生きて—』
広島女子高等師範学校附属山中高等女学校
安浦一期会発行）